

「教育実習（事前・事後指導）」の深化をめざして

— 江戸川大学における取り組みと課題 —

高 橋 克*

要 約

江戸川大学における教職課程の科目である「教育実習（事前・事後指導）」のあり方について、江戸川大学における教育実習の実際と、教育実習の事前指導や事後指導を通して得られた実習学生の自己評価などを確認する。「教育実習（事前・事後指導）」の課題として、実習生が教師として授業力を持って実習に向かうためには、3年後期に模擬授業を多く取り入れた授業力育成講座的なものが必要である。また、従来おこなわれている実習が終わった後の事後指導の総括に加え、これから開講される「教職実践演習」との関連を視野に入れた教職合宿との連携の可能性に期待したい。教科としての「教育実習（事前・事後指導）」は、教育職員免許法施行規則では単位配当1単位であるが、その含む内容は幅広く、より良い教育実習生を送り出すための重要な科目である。よって、これからも検証と改革されていかなければならない。

キーワード：教育実習，事前・事後指導，教職課程，模擬授業

第1章 はじめに

江戸川大学（以下、本学）は、平成19年（2007）3月16日に文部科学省から中学校教諭，高等学

校教諭の免許取得のための教職課程設置の認定を受け、平成19年度入学生から教職課程（詳細は表参照）が始動した。

教職課程では、教員免許取得に必要な科目を学ぶだけでなく、教師としての心構えや教授技術の基本から一人前の教師としての必須事項を学ぶ。その教職課程に大きな比重を占める教職課程の集大成ともいえる科目として「教育実習」がある。

平成元年（1989）3月の「教育職員免許法施行規則」改正により、中学校・高等学校の教員免許状を取得するには、これまで教育実習の2単位だったものが、事前及び事後の指導の1単位を含む3単位の履修が必要となった。大学は科目として教育

実習の事前及び事後の指導を責任を持って行わなければならないことが明示・義務づけられたので

江戸川大学で取得できる教員免許状の種類

学 部	学 科	免許状の種類
社 会	人間心理	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)
	ライフデザイン	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)
	経営社会	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)
メディア コミュニケーション	マス・コミュニケーション	中学校教諭一種免許状(社会) 高等学校教諭一種免許状(公民)
	情報文化	中学校教諭一種免許状(英語) 高等学校教諭一種免許状(英語) 高等学校教諭一種免許状(情報)

2008年11月28日受付

* 江戸川大学 ライフデザイン学科准教授
博物館学，民俗学，教育学

ある。

そして、科目としての「教育実習（事前・事後指導）」は、これまで各大学で教育実習の一環としておこなわれていたものが、より確かな実習を目指し、実習直前に実習業務・実習目標等の確認、実習後の確実な評価・発展を期するために位置づけられたのである。

この稿では、教育実習の意義を確認し、本学における平成20年度の実習と教育実習の事前事後指導の実際から、科目としての「教育実習（事前・事後指導）」の深化をめざして考察したい。

第2章 教育実習の概要と意義

第1節 教育実習の沿革

わが国の教員養成は、明治5年（1872）8月の学制頒布によるわが国の近代教育制度の開始に先だって、文部省が明治5年4月22日「小学教師教導場を設立するの伺」を正院に提出し、同5月13日正院から小学師範学校設立の許しがあって、東京にわが国最初の師範学校を設置することを決定したことに始まる。同5月29日、文部省は東京に師範学校設立。文部省は設立趣意書および規則書を各県に配布し生徒を募集。9月授業開始。アメリカにおける師範学校の方法にならって教員養成を開始し、翌明治6年（1873）東京師範学校に練習小学校を付設したことでいわゆる教育実習が始まるとされる。

第二次大戦前の教員の養成は師範学校や高等師範学校等の教員養成を目的とする専門の学校で行うことを基本としていたが、戦後は「開放制の教員養成」の原則を採用し、幅広い視野と高度の専門的知識・技能を兼ね備えた多様な教員養成を目的として、教員養成の教育は国・公・私立のいずれの大学でも教員免許状取得に必要な所要の単位に係る科目を開設し、学生に履修させることにより、制度上等しく教員養成に携わることができることとした。

この原則は、個性的で創造性豊かな幅広い学問的資質と教養を備えた教員の養成や、戦後の我が国の学校教育の普及・充実、さらには社会の発展

等に大きな貢献をしてきた。

第2節 教育実習の意義

教育実習とは、教師を志す者が、大学で教員免許取得に必要な科目を学び研究してきた事柄とその他の全ての知識を導入し、実際に教育の場で実践をとおしてその効果を検証し、より良い効果を導き出すために改善する方法を身につけることである。

実際に教育の場で観察、実習、考察をより多く体験し経験を積むことは、教育の意義についての体験的認識と理解を深め、教師として必要な知識、技能、態度、心構えなどの教師としてのあり方を実感することになる。

そして、「教えることを通して学び修得する」という教師の本義を実地体験することで、教育現場に適応した教育実践に変革させる分析力と実行力を確立する機会となるのである。

第3節 教育実習の概要

教育実習とは、教科を教えるだけの機会ではない。教師の活動領域はきわめて広く、教科を教えるほかにも次のような事柄があげられる。

① 生徒の理解

学校では、生徒が主役である。生徒は学校で生活し学び成長し続ける。学校での生活を基盤に、友だちをもち、生活圏をひろげ、知識を吸収し、能力を開発し続ける。このような生徒を、個々の個性や精神面からもじっくり理解すること。

② 教師の仕事の理解

教師は教える人として、学習の場である学校で学習主体としての生徒に学習分野や生徒指導といった分野で働きかける。同時に、学校の機能の遂行につながる一分野として、さまざまな校務を分掌する。また、生徒の保護者をはじめとする地域社会の生活全般にかかわる教師としてのあり方等を意識し、広く文化に関わる自覚を持ち活動するという教師の日常活動を理解すること。

③ 学校の機構と機能の理解

学校は一個の社会的機関である。総体として文化の伝達と創造にかかわっている学校のその仕組み

みと働きを理解し、地域社会での位置に即してとらえ、さらに国および国際社会全体の水準で学校の機構と機能を理解すること。

以上のように、生徒の理解、教師の仕事の理解、学校の機構と機能の理解を実地体験する事により、教師の活動領域の広さを理解する機会でもある。

第3章 江戸川大学の教職課程に対する 取り組みと教育実習

今日、法制面や社会的注目度など教師を取り巻く環境は大きく変化し、教育現場を取り巻く問題は犯罪の低年齢化や自己中心的な保護者への対応など多方面にわたり山積している。このような時代に現場に出て教師の責務を果たすには、人としての成熟と教師としての幅広く多面的な能力が求められる。

本学は、平成19年3月16日に文部科学省から中学校教諭、高等学校教諭の免許取得のための教職課程設置の認定を受けたのであるが、19年度以前の入学生の教員免許取得希望者にも門戸を広げての始動であった。

さらに、平成18年度で閉学した江戸川短期大学の教職課程で科目等履修生として教師を目指して勉学に励んでいた学生が、短大で修得した教職の科目を活用して新設なった大学の教職課程での教員免許取得に取り組むこととなった。

そのため、本来ならば平成22年度から始まる予定であった教育実習が、平成20年度から行われることとなり、早々の教育実習生送り出しとなった。

ここに、本学での教職課程に対する取り組みの一端と教育実習までの流れについての取り組みを述べる。

第1節 教職課程センター

本学では、平成19年4月教職課程開始と同時に、教職に対する意欲と教師としての使命感や責任感の醸成、教科や生徒理解のための専門的知識・技能等の獲得、円満な人間関係を構築するコミュニケーション力の獲得といった教師に求められる

資質能力を学生が身につけるべく働きかける目的と、教職課程の円滑な運営と教職課程履修学生の支援を目的に教職課程センターを設置している。

教職課程センターの教職課程履修学生への支援については次のような事柄があげられる。

① 教職課程センター講座

毎週水曜日、教師を目指す学生を対象に、実際の教育現場への理解を深め、教員採用試験の合格を目指すための筆記・面接試験対策の指導をはじめ最新の採用試験の情報共有などのゼミを開催している。そのほか中学校、高校の校長などを経験した講師による講演会、交流会をおこなっている。

② 教職合宿

教職課程センターに属する教職員のボランティアで、夏休みと春休みを利用した合宿で教師としての基礎学力の養成と模擬授業の指導案作成から実施・講評を集中しておこなう徹底した教師力養成講座である。

以上のように、教職課程の科目に相互に関係するような事柄を補強し教師への意欲を高め、教育実習に向けて実践的な教師力を身につけること、さらには教員採用試験のための受験指導により学生の教職に就くという目標を全面的に支援するものである。

第2節 教育実習までの流れ

教育実習はカリキュラムにより4年次に実施することとなっている。本学では、そのために必要な条件を示し、教職課程履修学生に指導している。また、必要な条件を満たさない場合はいかなることがあっても教育実習を実施することはできない。

次に「江戸川大学教職課程履修の手引き」の7.教育実習の履修についての教育実習履修の条件についての部分を示す。

③ 教育実習履修の条件について

以下の条件をすべて満たしていること。

ア) 次の科目を履修・修得済みであること。

「ボランティア論」、「教師論」、「教育学概論」、「教育心理学」、「教育制度論」、「教育課程論」、「教科教育法（社会・公民・英語・情報）」、「教育方法学」、「生

徒指導論」，「教育実習（事前・事後指導）」

イ）履修している全科目の出席状況が，出席に必要な日数の3分の2以上であること。

ウ）教職課程履修費および教育実習費を納入済みであること。

エ）江戸川大学教育実習担当者会議による面接を行ない，総合的に判断をして認めた者。

- ④ 実習予定校から教育実習の受け入れ内諾を，原則として実習の前年度12月末までに得ていること。

この条件を満たすことにより教育実習をおこなえるのである。

本学独自の条件として，③のエ）江戸川大学教育実習担当者会議による面接を行ない，総合的に判断をして認めた者。という項目がある。面接は2年生の後期におこなう。これには3年生の前期の段階で，原則として自身の出身校に教育実習の実施依頼に行くことになるので学生の確固たる信念があるかの確認と，実際の依頼時の面接での予想質問事項を一通り取り入れた模擬面接とその指導の意味がある。

さて，このような条件でおこなわれる教育実習までの手順の概略を学年ごとにここに示す。

・2年次

- 11月中に，教育実習履修事前面接および内諾依頼書下付についての申請をする。
- 12月中に面接実施。これまでの教職科目の成績等と面接により教育実習の不可を，面接終了後速やかに教職課程センター会議により判定。
- 不合格者には教育実習に関する手続きをおこなわない。
- 合格者は教職合宿への参加。

・3年次

- 面接合格者は，センター長名の教育実習依頼書を持参して実習希望校に申し込む。
- 内諾書受領。
- 教育実習内諾済み学生の教職合宿への参加。

・4年次（教育実習年度）

- 教育実習内諾済み学生は，教育実習（事前・

事後指導）を含む教育実習科目の履修をする。

- 4月中に学長名の教育実習依頼書発送。
- 承諾書受領。
- 教育実習事前指導。実習ノート配布。
- 教育実習。
- 教育実習事後指導。

以上の流れで実習がおこなわれるのであるが，教育実習には4年次履修科目として教育実習Ⅰ（高校のみの免許の場合）・教育実習Ⅱ（高校と中学校の免許の場合）のいずれかと教育実習（事前・事後指導）の履修が必要となる。

第4章 江戸川大学における 教育実習指導

では，教育実習の指導はどのようにおこなわれているのか。さらに教育実習の事前事後の指導に関する事柄に加え実際に教育実習を終えた学生の実際について記してみたい。

第1節 教育実習の内容

教育実習は，取得する免許に該当する教科指導をおこなうのはもちろんだが，そのほかにも教育現場の多くの領域を経験することとなる。いくつかの領域についてあげてみる。

- 1) 教科の学習指導（教科指導案の作成とその準備，実施および評価）
- 2) 総合的な学習の時間の指導（教科指導案の作成とその準備，実施および評価）
- 3) 学級活動の指導（安全確認・指導計画の作成）
- 4) 道徳の指導（教科指導案の作成とその準備，実施および評価）
- 5) クラブ活動の指導（安全確認・指導計画の作成）
- 6) 生徒会活動の指導
- 7) 学校行事の指導（安全確認・生徒との達成感の共有）
- 8) 必要に応じて個別的な生活指導，PTA活動および家庭連絡

9) 票簿等の事務処理

10) 職場における教師としての生活

このような多方面にわたる教育活動の全域について観察し、参加することによって大学では学ばない教育現場を体感することとなる。

教育実習は当然正規の教員の勤務と同じ拘束時間となる。授業をやって実習指導教員の評価を受ければ、それでその日の実習は終わりではない。全勤務時間を有効に活用し、実習校の全教育活動を観察し、許される限り参加するようにすべきである。

教育実習の期間は、極めて短時間に圧縮された、大学で学んだことを実践し評価、改良することのできる科学的実践期間である。わずか数週間にすぎない短期間で実習効果をあげるためには、各自の自覚と努力によって、この期間を自分の関われる教育活動のために、主体的に活用し、指導教員以外の校内同教科担当教員の学習指導、他教科の教員の学習指導等も観察を含めて積極的に指導を受けることも欠かすことのできないものである。

第2節 教育実習の事前・事後指導の実際

実際の教育実習の事前指導は、学生が実習希望校に赴き実習の内諾を得るまでの指導はもちろんであるが、大学における教職課程全般において常に教師たるものの考え方や物事に対する取り組みの姿勢なども説かれることから教職課程全般が事前指導であると言っても過言ではない。中でも、科目としての「教育実習（事前・事後指導）」は、教育実習の前後の指導という実習に直結した科目として重要な位置を占める。ここでは、平成20年度教育実習の本学の教育実習の事前・事後指導の実際を紹介する。

第1項 科目としての「教育実習（事前・事後指導）」の実際

本学は、教職科目としての「教育実習（事前・事後指導）」は、1単位で4年生の前期に設定している。シラバスを見てもらうと、「実習は教育課程の総仕上げの活動体験であり、それを通して教師としての必要な知識、技術等の資質の高揚に

努めることであるという、実習の意義・心得を事前により深く理解して実習に臨む準備をする。また、体験後の報告とまとめを行う」という内容で、

- 第1回 オリエンテーション（教育実習の意義・目標・心得・実習校への挨拶の仕方）
- 第2回 一般教養・論文作成指導
- 第3回 面接・礼儀作法・服装等の指導
- 第4回 教員の服務、学校の組織・校務分掌について
- 第5回 実習日誌の書き方・学級日誌の書き方他
- 第6回 学級経営、生活指導・クラブ活動指導について
- 第7回 板書方法・学習指導案の作成①
- 第8回 学習指導案の作成②
- 第9回 学級経営模擬授業
- 第10回 教科別模擬授業体験①
- 第11回 教科別模擬授業体験②
- 第12回 （事後指導）体験実習の報告レポートのまとめと提出
- 第13回 教育実習体験発表会①
- 第14回 教育実習体験発表会②
- 第15回 総括と評価（実習ノートの返却と評価）

以上15回の授業として組み立てられている。11回までが教育実習前で、12回以降が教育実習後である。

このように教育実習の事前・事後指導は、シラバスにあることを踏まえ模擬授業や教材研究、指導案作成といった教壇に立つ経験を多く積むことによって学生が自信を持って教育実習に臨み、事後に自己評価しその後の研鑽に活かせるように組み立てられている。

第2項 教育実習事前指導の実際

平成20年度の本学教職課程として最初の実習は、5月の中頃から6月の中頃までの1ヶ月あまりの期間に亘って実施されるため、全体としての指導が1ヶ月に亘り困難になってしまい、事前の指導内容も模擬授業の実施を含む多岐に亘ることから、教育実習前に十分な指導時間がとりにくいということが判明したのである。そこで、実

習予定学生と調整して春休みの2月から3月にかけて6回に亘って一般教養や、教師としての心得および模擬授業をおこなった。シラバスの1・2・7・8・10・11回に相当する内容であった。

7・8・10・11回以外は、一般常識テストと教育実習ノートに掲載の内容をテキストとしておこなった。以下に教育実習ノートの内容を示す。

(1) 全般的心得

1. 基本的心構え

教育実習は、実習生にとっては指導教員の指導下の実習であるが、生徒にとっては、その全人格生成の教育そのものである。したがって、生徒の人格を尊重し、次のことを常に考えて、責任をもって実行すること。

- a. 熱意と愛情をもって実習する。
- b. 自発的な創造性と旺盛な研究意欲をもって実習すること。
- c. 謙虚でかつ責任をもって実習すること。

教育実習は、以上を考え、実習期間中は実習校の教育方針にしたがって実習することとなる。

もちろん、本学学生たる自覚と実力とを持つとともに、実習校の校長・指導教員に対しては、学生としてふさわしい服装、礼儀、態度をとり、実習校の生徒に対しては、教師としての自信ある態度で接することができるようにしなくてはならない。

したがって、実習中は、つねに問題を教育の場に求め、その研究を続けるのは、授業の実習とともに大切な目標である。

2. 教育実習中の連絡

実習生は、実習校ごとに、全体、教科別など代表を定め、当該実習校の各教科（科目）主任および教育実習担当主任指導教員との連絡・指示経路を構築する。

(2) 勤務

1. 出勤・退勤

- a. 教育実習生の勤務は、実習校の指導教員に準ずるのを原則とする。
- b. 出勤は、特別の指示ある場合は別と

して、必ず始業10分前までに出勤すること。

- c. 出勤後は、ただちに出勤簿に捺印すること。
- d. 病気その他、一身上の止むを得ない事由により欠勤（遅刻、早退等）をする場合には、事前に指導案をそえて、実習校所定の方法により学校長宛に願い出る。病気欠勤日数3日以上におよぶ時は医師の診断書を添付する。
- e. 実習中、実習校の校外に出る時は、必ず指導教員の許可を得る。
- f. 退勤時刻は、実習校の指示を厳守する。
- g. 校舎内では、実習校所定の規則に従い、校舎の美化に率先して取り組む。

2. 管理・事務

- a. 与えられた場合には、指導教員の指導を受けて、校務・学校事務・学級経営等を分担執務する。たとえば、出席簿、累加記録、学級日誌、身体検査簿等の整理記入等。
- b. 実習生控室の整備はもちろん、配当学級の教室の管理、特別教室、準備室の管理運営に万全を期すること。

3. 帳簿、校具等の使用

- a. 学校に備えつけられている帳簿等を使用しようとするときは、指導教員の許可を受け、正式の手続きを経てからおこなうこと。学校の図書についても同様。
- b. 学校の図書、帳簿、校具等で、貸与または使用を許可されたものは丁寧に使用し、使用後は必ず所定の位置に返却する。決して許可なくして校外に持ち出してはならない。

4. その他

- a. 学校・指導教員、生徒および生徒の家庭について、職務上知り得た事項は、教育実習中はもちろん、終了後

- も他人に洩らしてはならない。
- b. 大学生としての校外活動を、実習校に持ちこんではならない。
 - c. 火気の取り締り、水道・電気等の使用には細心の注意を払い、特に、実習生控室の管理は注意すること。
 - d. 実習校での実習生のために設けられる研究会等の実習プログラムには積極的に参加する。
- (3) 学習指導
- a. 「学習指導案」を作成し、必ず該当授業前日までに指導教員に提出、その指導を受ける。
 - b. 授業指導をおこなった場合には、指導教員の講評や参観実習生の批評を受け、その要点と自分の反省を「教育実習日誌」に記録する。
 - c. 本学指導教員の指導、参観があった場合も前項に準ずる。
 - d. 同じ教科（科目）で同一学級（学年）配当の実習生は、研究のため、または他の実習生欠勤等の場合は、いつでもかわって実地授業をやるように指導案を準備しておく。
- (4) 生徒指導
- a. 実習校の指導方針に必ず従うこと。
 - b. 生徒の指導に当たっては、公正明朗であることを期する。
 - c. 特に、教育実習生は、校外指導、家庭訪問等はおこなわないのを原則とする。また、許可なくして、調査をおこなってはならない。生徒ならびにその家庭との私的な交際は絶対におこなわないこと。
 - d. 次の諸活動を通じて、当該学校の担当指導教員の指示に従って、生徒の指導に万全を期すること。
 - (ア) 週番勤務
 - (イ) 生徒会の活動
 - (ウ) クラブ会活動
 - (エ) ホーム・ルーム活動
- a. 生徒には体罰を与えてはならない。特に要注意生徒の指導は、当該学級の担任指導教員の指示に従っておこなうこと。
- (5) 参観
- a. 授業参観は、校内、校外を問わず、参観の礼儀を守る。とくに、時間途中の入退室は避けるように心掛ける。
 - b. 授業参観にあたっては、必ず各自課題を持っておこなうこと。
 - c. 本実習期間中においては次のような参観をすることが望ましい。
 - (ア) 同一指導教員に配当された実習生の授業参観
 - (イ) 同一教科に配当された実習生の授業参観
 - (ウ) 他教科に配当された実習生の授業参観
 - (エ) 特別活動、HR 参観
 - (オ) 同一教科の研究授業
- (6) 教育実習日誌
- a. 教育実習日誌の各項目は、それぞれの注意事項にしたがって記入すること。
 - b. 教育実習日誌は、毎日、指導教員に提出、閲覧の上、助言及び捺印をうけること。

以上である。この内容は、その後折に触れ指導していくのであるが、事前指導では一般常識と学習指導案作成と模擬授業の指導については念入りにおこなった。

20 年度の前期になると、水曜日の 1 限に開講して、実習予定者の模擬授業の実施と講評を中心とした指導で終始した。さらに、完璧な授業内容などというものはないのであるが、教師が明確な教育目標と意欲を持って臨むことにより生徒主体の授業になることを重要とし、自己の持つ教師としての理想像を収斂させ、教育の現場での目標の明確化の必要性を説いた。結果、実習予定者は 2 月からの成長は実習生本人でもわかるほどに著しいものがあるという実感から、教壇に立つ自信を

抱いて実習に臨むこととなった。

第3項 教育実習中と事後指導の実際

教育実習期間中には「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」の担当教員が巡回指導での実習現場における指導もおこなう。本学では、「教育実習Ⅰ・Ⅱ」の担当教員は、「教育実習（事前・事後指導）」の担当教員となっているため、たとえば、実習前の実習校と実習予定学生の打ち合わせの指導などは、連絡の取り方から実習教科の指導範囲の予習にいたるまで「教育実習（事前・事後指導）」と「教育実習Ⅰ・Ⅱ」の指導が同時進行するということになる。

教育実習の本学課程での科目である「教育実習Ⅰ」「教育実習Ⅱ」では、その指導の大半は実習校の指導に委ねているのであるが、実習生はそれまでの教職科目全般で培った教育力と教師としての情熱と使命感で全力を尽くして実習に臨むのである。

教育実習は大学生の日常からすればハードである。そこでは、自己に課した目標や教育現場でしか成し遂げられない実習生の研究課題をしっかりとって主体的に日々の実践を積み重ね、教育実習でこれだけはつかんで帰ろうという意識で臨むことが要求される。ただ単に忙しい毎日を夢中で乗り切り、教育実習を終えたことによる達成感だけにとどまることは教育実習ではない。教育実習によって得た結果や課題を教育実習以後の教師としての自己の研究課題として取り組むための推進力とすることが重要である。

そのため、実習生が教育実習に携行する本学教職課程センター編集・発行の「教育実習ノート」をもちいて、実習中には以下のような日々の具体的課題を持ち実習終了時に自己評価することを指導し、自己に課した研究課題の実践と研究レポートのテーマ例を挙げてレポート作成を指導している。

本学では、実習の実態に合わせ、実習中は以下の事項に日々意識することを求めるものである。

1. 教材の研究を十分したか

2. 生徒理解に十分つとめたか
3. 指導計画を綿密に考えたか
4. 効果的な学習指導案を作成したか
5. 教具・補助教材を活用したか
6. 板書を機能的に行ったか
7. 発問を効果的にすることができたか
8. 授業の工夫を十分にしたか
9. 公平に生徒に接することができたか
10. 正直に生徒に対応することができたか
11. 特別活動に積極的に参加したか
12. 学級経営にも気を配ったか
13. 教師や他の実習生と協力することができたか
14. 生徒から親しまれ信頼されたか
15. 自発的に誠実に勤務できたか
16. 明るく元気に勤務できたか

以上は、学校の機能、教師の役割、生徒の実態、保護者や地域社会の実態と課題の理解をした上で、教科指導及び教科外指導を担当するのに必要な実践的能力の基礎に関する事柄であろうが、日々の課題として重要である。

実習生は、日々の課題を含む実習の研究テーマを設定し、研究レポートとして提出できるようにしてほしい。ここに、研究レポートのテーマ例を挙げておく。

- ・教育実習過程における私の授業の変遷と反省
- ・生徒の興味・緊張を持続させる授業の実践と課題
- ・「わかる授業」のための発問の工夫
- ・学級における教師と生徒の関係の在り方について
- ・私の授業と現場の先生の授業とを比較して

教育実習が終わり、学生が大学に戻って来ると事後指導が始まる。各自の実習校での実習模様の報告と研究授業を再現して互いに評価し合う。実習を経験した学生は、教壇に立ったことで学生の視点から教師の視点で物事を捉え理解するようになる。その発言は教師としての発言になっている。

そして、教育実習のまとめとして教育実習の総

括レポートを作成提出することとなる。

平成 20 年度はそれらに加え、可能な学生の教職課程センターの夏の教職合宿への参加を求め、後輩学生への実習の実践報告と合宿のサポートをおこなった。

第 3 節 教育実習を終えた学生の姿

教育実習を終えた学生は、どこことなく自信を持ったオーラを発していると感じるのは私だけであろうか。実習を終えた学生にはレポートや実習での研究授業の再現をおこない、研究対象としての教育実習についての考察や成果を確認する。

第 1 項 教育実習総括レポート

ここでは、教育実習の総括レポートの内容を紹介し、実習を終えた学生が教育実習で何を学び、どのように実習中の自己を評価しているかを見てみたい。

1. 教育実習で学んだこと

ア. 発問の大切さ

- 効果的な発問をするには教材研究が大切である。実習校の副校長の「教師は生徒に 1 から 2 の内容しか教えなくても 10 の教材を準備しておく必要がある」という言葉を実感し、実習中の意欲を維持できた。
- 授業の中で大切にしていたことは、生徒達に教えていく授業ではなく、生徒に考えさせる授業を中心にしてきました。生徒自身が、直接人権に向かいあうことで、人権について深く考えることができるようになることが目的です。そこで難しいと感じたことは、生徒にどのような問いかけをすれば生徒が考えるようになるかということです。生徒にいい問いかけができれば、生徒もいい答えを出すことができます。逆にいい問いかけができなければ、生徒も考えることができなくなってしまいます。そのようなことを実習で学ぶことができました。

イ. 教師は常に先のことを考え行動することが大切

- 体育の授業を見学した時に指導教員から

「何かが終わった次の瞬間には又何かが始まる」、課題が与えられて、それが終わると子供たちは遊びだしてしまう。あるいは、何もしない状態になる」と聞かされ、授業中に指示の間があいてしまい教室がざわついたことの理由と対処法がわかった。常に次へ次へと考え、指示をだすことである。

- 体育祭で賞をもらって喜んでいる生徒たちに、欠席してしまったそれまでクラスを盛り上げていた生徒への報告を提案したら、公衆電話越しにクラスが一つになって喜びを分かち合った。クラスの一体感、仲間意識もより強くなったことを体験した。
- 「備えあれば憂いなし」教育実習生の備えが 120%でも足りないくらいだと考えて臨んだ方がよいということが身にしみて理解できた。

ウ. 生徒とのコミュニケーションをとること

- 初めての授業はコミュニケーションが十分に図れなくて授業をしていて一方的になってしまっているように感じた。しかし、日が経つにつれ、授業でも生徒が積極的に発言するようになっていった。これは、授業をしている私にゆとりがでてきたというだけではなく、休み時間など、授業以外の時間にも生徒とコミュニケーションをとるようになっていたからである。「授業時以外の生徒とのコミュニケーションは必ず授業に生きてくる」という指導教員の言葉をこれからも大切にしていきたい。
- 体育祭を通じて少しずつ生徒との間を縮めることができた。
- 指導教員から「生徒が興味を持つように演技できるようになった方がよい」と生徒の興味関心をどう持たせるかが課題となった。

エ. 事前の模擬授業の大切さ

- 教える内容を指導できるかという点も問われるが、人前で堂々と話すことができるか、これが一番に問われるところであると考えている。はじめての授業実習でも、指導教員に「とても落ち着いていた。これなら生

徒も安心して授業を受けられる」と言っていた。数回、上手いかならずに焦ってしまったこともあったが、落ち着いて取り組めるかによっても生徒の反応というのは変わってくることを実感でき、とても勉強になった。大学の後輩たちにも積極的に模擬授業に参加し、人前で話すことに慣れてほしいと思う。

- 模擬授業は、ほぼ生徒のいない中、特にいい反応をみることができないかなり厳しい授業が展開されました。しかし、その中で、教育実習をやっていくうえで大切なことをたくさん学ぶことができました。そのお陰で、実際に教育実習にいった時は、生徒の反応があるため、模擬授業で授業をするよりずっと気持ち的な面で楽に進めることができました。教育実習を実際におこなって初めて、事前授業の意味や先生方がどうして、厳しく私達に接してくれたのかがわかりました。
- 模擬授業をするのとしのないのでは実習での授業に雲泥の差がある。
- 学習指導案や模擬授業で、あれもだめこれもだめと注意されることで、指導案作成能力や実際の授業での生徒の質問への対応の仕方、先生としての態度や権威が培われた感じがする。

2. 教育実習の自己評価

- 教材研究方法の確立ができた。
- 教師という仕事の魅力再確認。「教師になりたい」から「教師になる」という意識の変化。
- 教育実習は、教師へのスタート台に立つ準備である。
- 現在の教育を身をもって体験をすることができました。
- 学校の教師とは、とても大変な仕事ではありますが、生徒の成長をみることができたり、喜び顔をみることができたりする、とてもやりがいのある職業だと思いました。

以上である。これから、事前指導でおこなった

模擬授業体験の大切さや、発問の大切さなどの教師として必要な技術的な事項の実感を伴った修得の姿。教師としての心の持ち方。教師と生徒との直接の関わり方の大切さの実感と実践による、生徒とのコミュニケーションの確立された授業などがうかがえる。自己評価には、教師としての喜びを知り、教師になることへの意欲の強まりがうかがえ、自己の立場の客観的な把握がなされていることがわかる。

第2項 教職合宿での実習経験者

教職課程センターでおこなう9月の合宿（参加者2,3年生）に、教育実習を経験した学生に補助指導員的な立場で参加してもらった。平成20年は、男子1名であった。この学生は、自身の実習のビデオを持参し、自己の教育実習を語り、東京都教員採用試験についての体験も実際に出された問題を提示して後輩学生に披露してくれた。この学生の合宿参加記を紹介する。

9月の合宿では、「基礎基本を学ぶこと」を目標にしたと同時に「協調性を高めること」というのも大きな収穫であったと思う。しかし、「失敗したらどうしよう。恥ずかしい。」などといったように、学生の意識が、あまり高くないことに少し残念な気がした。特に、模擬授業は2回できるチャンスがあったのにもかかわらずトライしない学生が多かったことは残念である。

学生が、やや消極的であった背景には「教材の準備の仕方が分からない」といった声があるようである。事前に準備をしてくるように伝えて、準備不十分であったところにも学生たちの意識が低かったのではないかと考えてしまうが、具体的にどのような本を参考にすると良いか、大学側で、もう少し「教材研究に使う教材」を用意すると、学生たちはしっかりした準備ができるようになってくると思う。

また、合宿では急に調べたいものがあっても資料が不足がちである。そういった意味でも「教材研究に使う教材」を用意すると、よ

りスムーズに模擬授業が進んでいくと感じた。

今回の合宿では「基礎基本」ということであったので、その目的は達成できたと思うが、今後は、もっと模擬授業の機会を増やしていくと、実際の授業実習のときには、子どもたちの前で堂々と構えることができるようになると思う。

合宿に参加した者として、勝手に意見を述べさせてもらいましたが、合宿というのは学生の意識を喚起することができ、また、リフレッシュの時間なども含め、協調性を高めることができるので、今後も続けてほしいと思います。

以上、自身が実習で感じたことを基礎に後輩たちのことを憂えている所などは、教壇に立ったことで学生の視点から教師の視点で物事を捉え理解するようになった、教師の意識をもった先輩としての余裕が見える。このように、学生間の学年を超えた縦軸でのつながりの育成も本学の教職課程の大切なことである。これが伝統の下地になり厚みある教職課程になってくれるよう期待するところである。

第5章 「教育実習（事前・事後指導）」の課題

「教育実習（事前・事後指導）」は、教育実習を挟んで実施される科目としての位置づけであるにもかかわらず、教育職員免許法施行規則では1単位である。当然、本学でも1単位をあてているものの、平成18年7月11日の中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」に盛り込まれた、教育実習において教員を志す者としてふさわしい学生を責任を持って実習校に送り出すために、教職課程全体を通じたきめ細かい指導・助言・援助をおこなうことが必要^①という答申の精神を実践している本学の教職課程では、これまで見てきたように1単位相当以上の時間と労力をかけて学生の指導・助言・援助をおこなっている。

教育実習生の実習先での充実した実習のために

は、画一的な指導では十分でなく、勢い学生個人個人の教養や教育力に応じた指導が必要となり、それが一番効果的であると思われる。

このように教育力を持った学生の育成と教育実習支援をはかることを前提に考えて、教育実習の事前・事後指導という直接的な科目名を持つこの教科の、本学での取り組みの理想的なかたちを構築してみるならば、3年の後期に教育実習の事前指導という意味で模擬授業を中心とした授業力育成のための講座を設置し、4年前期は現行の「教育実習（事前・事後指導）」とし、事前は実習の心構えと模擬授業、事後は、教育実習の総括授業をおこなうこととする。

さらに、教職課程受講者の学年を超えた教師像の継承という観点から、教育実習修了者の教職合宿への参加を求め、教育実習の実際とその取り組みについてを後輩学生に伝えることによる実習修了者本人の総括をおこなう。このことは、今後開講しなければ張らない4年生の後期におこなうことになっている「教職実践演習」との関連もあり、うまく単位化できれば本学の活動と新しい科目の関わりが理想的となるであろう。

第6章 おわりに

教育実習を体験することは、大学生にとって大学生活のモニュメントであり、それは授業を受けることに慣れた受動的、他律的立場から自己変革をした能動的自律的な積極性を持った人間的成長のモニュメントである。また、教師として教える立場に立ったことで教師としての喜びを知り、教師になることへの意欲の強まりがうかがえ、自己の立場の客観的な認識がなされる。

このような得難い体験と自己の成長と教師としての成長が得られる教育実習は、教職課程による理想的な教育論や教師像の構築と事前の実践力の養成があって初めて得られるものと考ええる。さらには、自己の主観的な体験談に終わってしまいかねない教育実習を、大学生活でおこなわれた学生各自の専攻の専門的な取り組みと、指導教官の指導により培われた科学力によって、客観的に分析

評価して普遍な教育活動として認識するまでに至った。

このように教育実習は、学生を成長させる。この得難い機会を最大限に生かせるようにするのが、「教育実習（事前・事後指導）」である。それだけにその内容は常に検証され、改革されていかなければならない。

《注》

- (1) 平成 18 年 7 月 11 日の中央教育審議会「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」のⅡ．教員養成・免許制度の改革の具体的方策，1. 教職課程の質的水準の向上，(3) 教育実習の改善・充実の中で，

課程認定大学は、教員を志す者としてふさわしい学生を、責任を持って実習校に送り出すことが必要である。各大学においては、これまで、教育実習の履修に当たって、あらかじめ履修しておくべき科目を示すなどの取組が行われてきたが、今後は、履修に際して満たすべき到達目標をより明確に示すとともに、それに基づき、事前に学生の能力や適性、意欲等を適切に確認するなど、取組の一層の充実を図ることが必要である。

また、必要に応じて補完的な指導を行うとともに、それにもかかわらず、十分な成果が見られない学生については、最終的に教育実習に出さないという対応も必要である。

また、同(4)「教職指導」の充実——教職課程全体を通じたきめ細かい指導・助言・援助——には、

これまで、教職指導については、課程認定大学により取組に大きな差があったが、今後は、どの大学においても、学生の適性や履修履歴等に応じて、きめ細かい指導・助言・援助が行われるよう、教職指導の充実に努めることが必要である。このため、法令上も、教職課程全体を通じた教職指導の実施を明確にすることにより、

各大学における積極的かつ計画的な取組を推進することが適当である。
と述べられている。

参考文献

- 中央教育審議会 2006「今後の教員養成・免許制度の在り方について（答申）」平成 18 年 7 月 11 日
中央教育審議会 文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06071910.htm
文部省編集・監修 1981『学制百年史 史料編』株式会社帝国地方行政学会
文部科学省『学制百年史 史料編 5 年表』
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz198102/hpbz198102_2_194.html
文部省編集・監修 1992『学制百二十年史』(株)ぎょうせい
文部科学省『学制百二十年史』
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpbz199201/index.html
江戸川大学教職課程センター『教育実習ノート』江戸川大学教職課程センター
早田武一郎・加澤恒雄 1994「国立大学と私立大学における教育実習の抱える問題点」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』No. 3
和歌山大学教育学部附属教育実践総合センター
小林宏己 2007『体系的な教員養成カリキュラムの中核存在としての教育実習——東京学芸大学の教育実習指導体制——』『教職課程』6月号 協同出版株式会社
菱刈晃夫 2007「教職の原点である教育実習の深化へむけて——経験と思考との循環を目指す国士舘大学での取り組み——」『教職課程』6月号 協同出版株式会社
澤登義洋 2008「教育実習事前事後指導の今後の方向——少人数演習形式による教育実習事前指導受講者へのアンケート調査をもとに——」『教育実践学研究』第 12 号 山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター